

愛知・川の会

調査団体名	愛知・川の会	団体代表者名	向井克之 会長(2017～現在 4代目代表)
設立年	2003年	対応してくれた人の名前	近藤朗 事務局長(2017～現在)
団体URL	特になし		(2013～2017 3代目共同代表)
活動拠点	愛知県内を中心に中部、全国へ	調査員	手塚透吾、太田修、吉橋久美子
取材日	2018年12月28日	レポート作成者	近藤朗、吉橋久美子

活動内容

よりよい河川と流域を目指して、行政(河川管理者)と市民、学識者など、様々なセクター間をつなぐ活動を展開中。現在の会員数は約100名で、多様なセクター、若者達を含めたあらゆる世代の参画を期待している。2003年の設立以降、河川を通じて「学ぶ」、「繋ぐ」場づくりを実施、そして今「行動する」会を目指し活動。

目指すのは、より良い河川と流域、そのための育て。

- 学ぶ場づくり 講演会やシンポジウム、川のエクスカーショ、多自然川づくり研修会など多数実施。
- 繋ぐ場づくり ○ 愛知県内での「行政懇談会」、「活動発表交流会」、市民団体も交えた「現地交流会」実施
○ 全国「川の日ワークショップ(1998～)」、「いい川・いい川づくりワークショップ(2008～)」への参加(全国、韓国などとの川仲間交流の促進)。
- 行動する会として ○ 個々の会員(組織)活動で活かす / 名古屋市水辺研究会(國村副会長)の他、(一社)Clear Water Project、地盤工学会、土木学会、木曾川研修会、758ミズべる会など
○ 愛知県事業「ブラアイチ」(2017～)の協力団体として、河川文化を伝える役割を担う。



総会・記念講演会「川筋の変遷」



矢田川エクスカーショ



ブラアイチin 碧南

キャッチフレーズ

人と川の新時代へ ～ 歴史・文化・営み・環境を知り、流域を未来へと繋ぐ役割を担う。

会のモットー(何を大切にしているか)

河川や流域に関するさまざまな関係をつなぐ「センター機能」を目指す。

連携している団体・専門家・自治体など

日本河川協会、愛知県(ブラアイチ事務局含む)、中部地方整備局、その他河川関連部局。2017年のブラアイチ開始以降は、開催自治体(岡崎市、蟹江町、碧南市、犬山市、豊川市)との連携を強める市民団体としては、川づくり会議みえ、当会会員でもある(一社)Clear Water Project、名古屋市水辺研究会など多数。全国組織であるNPO全国水環境交流会とは、「いい川・いい川づくりワークショップ」、「いい川(多自然)研修会」などを通じて発足以来連携を進めている。



河川文化を語る会
「銚子川など」内山りゆう
日本河川協会との共催
(2017)



いい川・いい川づくりワークショップ
in 北海道・帯広(2018)

設立から現在に至るまで変化したこと

- 2003年、公益社団法人日本河川協会愛知県支部(個人会員の会)の位置づけで発足。このような組織は全国で15団体ほどあるが、愛知・川の会は行政、そのOB関係者だけでなく、発足時より多くの市民団体を交えてスタート、これは他に類を見ない構成だった。
- 最初の10年間(2003年～2012年度)は、学びの場、交流の場を主に展開した。
／ 河川文化を語る会 2回(2003、2009)、その他講演会 16回、活動発表交流会 5回、行政懇談会 7回、川の日WS2005、水シンポジウム2007、多自然川づくりWS2009、外来種シンポジウム2010、現地交流会 15回、流域エクスカッション 矢作川(2006)始め7回(これらは2013以降も継続中)。

- 2013年度より、私と國村、井上による共同代表制に移行。近藤は、初の現役県職員による代表を担うこととなる。その少し前、10周年記念講演会「川と水と国土の未来を考える」東京大学・沖大幹教授の言葉が胸を打つ。「出来ることではなく、しなければならないことをすべきだ」～ここから自分なりの試行錯誤を始めた。個々が「学ぶ」から「行動する」へと舵を切ろう。まずやるべきこととして
 - 愛知県内、会員間だけでなく、もっと多様で広域的な連携を進め、会としての行動力を高めよう。
 - もっと若い世代と関わり、次世代育成・継承を進めよう。



2013 沖大幹氏 講演会

- 広域連携については、2013年度の現地交流会・行政懇談会を岐阜県、杭瀬川(大垣市)で実施。川づくりに関する愛知・岐阜両県職員の情報交換の場も設定した。あわせて実施(共催)した「愛知・いい川づくり研修会」においても岐阜県で始められた多自然川づくり推進制度を学ぶ。また2014年から「川づくり会議みえ」が始めた流域を巡るエクスカッションにも参加し、現在に至る。また2017年度に事務局長となった近藤は、中部圏としての広域連携を模索し始め、2018年11月に長野県で開催された「第4回川ごみサミット in 下諏訪」、2019年2月に静岡市での「第18回しずおか川自慢大賞」に参加、交流を図り、今後の中部としての連携を提唱した。
- 次世代～については、2015年2月に新たな取組みとして「流域カフェ」開催が、大きな出発点となる。当会会員になっていただいた(一般社団法人)Clear Water Project 企画で、「流域をめぐる若者達の取組み」紹介をお洒落なレストランで開催。若者達が展開する、「[小さな自然再生\(→ 当事例集「岩本川創遊会」\)](#)」やクラウドファンディングなど斬新な取組みが披露される。以降、2017年に発足した758ミズべる会、木曽川研修会などとの連携へ繋がっていく。



中部の若者達 2015 流域カフェ



2017 堀川 船上での「758ミズべる会」



2017 堀川ウォーク(川の会+ミズべる会)

- 2017年度より向井克之会長が就任。この頃から従来の河川法の目的である 治水、利水、環境のみならず、地震なども含めた防災、歴史・文化、まちづくりと観光、食などの生活や「営み」など幅広いテーマ・切り口で河川の多様性を探り、これを広く外部(一般市民)にも発信する活動を始めた。特に同年、愛知県が始めた 歴史と地形から地域を知る「[ブラアイチ](#)」事業の協力団体となり、案内役を担っている。これは、まちづくりに携わる県・自治体の土木系職員らが自ら企画・実施している点の特徴。まちづくりには「今ある姿」だけでなく、歴史・地形の変遷を知ることも重要であることから、「[ブラアイチ](#)」推進は、人材育成面も含めた大きな可能性が感じられる。

愛知・川の会と「矢作川」の関わりについて

会設立前の時代背景を述べたい。私(含む河川管理者)は、実に多くのことを矢作川から学んできた。河川管理における戦後いくつかの転換期において、矢作川では常に先駆的な取り組みが展開されたのである。

まず、1970年頃の公害・乱開発時代の矢作川沿岸水質保全協議会・内藤連三氏の戦い。(→本事例集参照)「流域は一つ、運命共同体」を合言葉に、画期的な水質汚濁管理システムが構築された。

そして1990年～河川行政に河川環境が目的化され、多自然型川づくりと市民協働が提唱された時代。豊田市・矢作川では、古巣水辺公園・水制工(1991年～)を始めとする近自然河川工事が推進され、次々に河川愛護会も誕生(→流域圏担い手事例集(2018.3月)参照「古巣水辺公園愛護会」など)し、1994年には「豊田市矢作川研究所」、1996年には「矢作川天然アユ調査会」(→流域圏担い手事例集(2018.3月)参照)が設立された。これらは全国でも類を見ない取り組みである。

2000年9月に愛知県を東海豪雨が襲い、矢作川でも甚大な災害が発生したものの、それにも負けず翌年2001年には、豊田市において「矢作川宣言」が採択され、行政と市民による矢作川「川会議」が設立された。同年、「川会議」は、東京で開催された「第4回 川の日ワークショップ(WS)」に参加し、全国数多の中で見事グランプリを受賞した。これを契機に、「川の日WS」を豊田市・矢作川で開催することを提唱し、2005年(第8回WS)に実現した。この時の現地実行委員会を構成したのが、2003年に発足した「愛知・川の会」と、矢作川「川会議」であり、関わりは深い。さらに、「川会議」構成員である矢作川漁協は、2003年に「環境漁協宣言」を採択し、新時代の漁協のあり方を目指していた。

近藤個人としては、仕事上も矢作川研究所創設時のアドバイザーを務め、WSグランプリ受賞時のメンバーであった事も含め、極めて関わりが深い。「愛知・川の会」創設時には、河川管理者として、矢作川での先進的な取り組みを県下に広げたいという思いも強かった。矢作川から多くを学んだ者として、国交省豊橋河川事務所が事務局となって現在展開中の「矢作川流域圏懇談会(2010～)」、及び「担い手事例集調査(2013～)」に関わらせていただくのは当然のことであり、「矢作川に恩返ししたい」思いでもある。



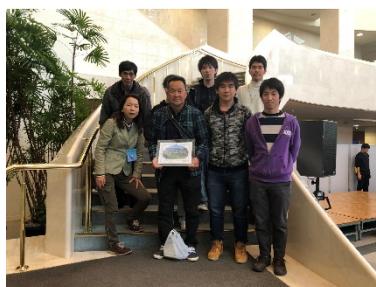
矢作川古巣水辺公園 2007年土木学会デザイン賞受賞



2001年 矢作川「川会議」

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動

特に「ブラアイチ」がそのツールとなっている。さらに会員が個々の活動で何でも実践していけば、広がっていく。例えば、近藤が「愛知・川の会」活動を踏まえ、外で展開しているのが、「22世紀 奈佐の浜プロジェクト」である。伊勢湾流域を発生源とする海岸漂着ゴミのかなりの部分が鳥羽市答志島に漂着する。そこで、愛知・岐阜・三重の広域連携プロジェクトを立ち上げ、「豊かだった伊勢湾」の再生を目指し、流域エクスカージョン、ゴミ清掃などを通して広くその実態を知らせ、学びながら課題解決の道を探っている。100年後の健全な流域圏を目指しているため、当初から3県の学生など、多くの若者達の参加を得てスタート(2013年)。その中で学生交流会も運営している。



2018いい川・いい川づくりワークショップ(北海道)での奈佐の浜プロジェクトチーム



鳥羽市内での若者達

現在直面している課題

一般的に高齢化と後継者(若手・担い手)不足が課題と言われているが、果たしてそうだろうか？
会の外に出て交流してみると、あるいはこの事例集調査を通して、随分と若者達が活躍していることに驚かされる。彼らに話を聞くと、環境保全や地域再生などへ高い意志を持っているのと同時に、既存の団体や活動にとらわれない自由で柔軟な発想を持っていることに気付く。そうか、意思の高い若者達は手垢にまみれた昔ながらのシステムを引き継ぎたいわけじゃないんだ。私たちは、そのことに気付くべきである。

ならば、私たちのようなベテランは、さらに謙虚さが必要で、今まで以上に常に学び続ける姿勢を維持すると共に、古い価値観を若い人たちに押し付けず、手助けする立ち位置がよいと感じる。私個人が、その手本としているのが根羽村の芸能集団「天下杉」(平均年齢70歳)である。(→山村再生担い手事例集Ⅲ(2016.3月)参照)
「愛知・川の会」も設立後16年、世代継承をテーマとするならば、弛まぬ向上心、謙虚さ、次世代支援の気持ちを持ち続けたい～楽しみながら。この1年程それを踏まえ、若い人たちに声をかけてきた。おかげで学生たち含め、25名の方に新規入会いただいたが、直接河川管理や計画に携わる現役世代にもっと関わっていただきたいと願う。そして、本分の領域でやりたいことを自由に活動してほしい。



今後やってみたいこと

長期的な夢はいくつかあるが、具体的に思っていることが二つある。

○ 矢作川筏下り大会の復活

以前は、古巣水辺公園～御立公園までの間で開催されていたが、12年間ほど開催されていない。川と水辺を再び身近なものとする経験を皆で共有するため、復活させたい。実は、豊田市での筏下り大会を見習って、今は下流の安城市で継承されている。

(→本事例集「矢作川くだり実行委員会」参照)

○ 「いい川・いい川づくりワークショップ」を中部で開催

～ 広域連携と多世代協働をテーマに

2005年に開催された第8回「川の日」ワークショップon 矢作川は、当時東京以外で展開された唯一の大会であった。あの熱気を再び中部地域として共有したい。中部とは、愛知、岐阜、三重、静岡、長野までを考えている。場所は、これらのどこでも良い。2020年の開催を目指したい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

どちらも10年以上前に開催したイベントである。次世代を中心として展開されるべきだろう。私たちは、それを支えたい。その人脈やネットワークは、既に熟成されつつある。

矢作川で言えば、「橋の下世界音楽祭」の世代、豊田や岡崎では「ミズベリング」、「かわまちづくり」が展開され、「りた」を始めとする新しい取組みが動き出している。(以上→流域圏担い手事例集(2018.3月)参照)

三重県でも鈴鹿川「魚と子どものネットワーク」、3県連携する「22世紀 奈佐の浜プロジェクト」の若者達、岐阜、長野や静岡県でも山や川で次世代が育っており、連携を模索している。

チームオリジナルの質問 <質問内容> ネットワークのつなぎ方、広げ方について教えてください。

私自身の経験から、組織のなかに閉じこもっていないで、「現場に出かける」ことが大切。いつも相手の懐に飛び込んで取材をし、思いを理解することでつながっていくという手法を続けてきた。実は、ネットワーク組織を標榜する団体が、いつの間にか(会員や活動が)固定化され、徐々に閉鎖的となっていくという経緯をいくつか見てきた。むしろ一個人、一会員という立場のほうがネットワークのつなぎ役になれるのではないか。

その他、伝えたいこと

この日対応してくださった近藤朗さんは1980年に愛知県の職員となり、治水・利水から環境へと大きく舵を切った河川行政の移り変わりのただ中を生きてこられた。長年にわたり河川行政に携わっておられた立場と、市民ネットワークをつなぐ二つの立場から、活動の中核を担っておられる。

「愛知・川の会」などの活動をするようになったのは、豊田市を流れる矢作川の多自然川づくりに関わったことが大きいという。当時豊田市は川づくりの先進地であり、川を熱く語る人々がいた。その人々とは「けんか」もしたが、同時に「(川を良くしたいという)同志」であり、その人々との付き合いが今につながっているという。

だが四半世紀も経つと、人も組織も「老化」して行く。豊田市、矢作川ですら、「次世代への継承ができていない」と近藤さんは感じられたようだ。ある意味「反面教師」としても学んだ事もある。常に向上・変革し、血を入れ替えなければ前に進まないと。

課題となっている「活動の次世代への継承」については、若い人を活かす組織のあり方が語られた。「今までやってきたことを繰り返す必要はないし、定めた目的に向かうものであれば、手法はどのようであってもいい。個人個人が会を“ツール”だと思って、“使って”ほしい。会そのものが、直接川づくりができる訳ではない。川に関わるそれぞれの会員の(会員以外であってもいいんだけど)、仕事の本分でいかしてもらいたい。そのための応援は惜しまない」そうだ。例えば「学び」や「仕事」のために、参考となるような川に連れて行ってほしいというリクエストがあれば、今まで何度も連れて行ったし、これからもいくらかでも連れて行く。

「川」をテーマとするということは、流域で考えれば全ての人と地域が含まれることになる。そう考えると「川」に限らず、山であれ、海であれ、都市であれ、いい地域づくり、人と人、人と流域とのいい関係づくりにつながるならば、どんなアプローチや関わり方をしてもよいと、近藤さんは思っているようだ。



古賀河川図書館を訪問した近藤さん(右)

写真



取材風景。「岡崎市図書館交流プラザリぶら」にて。



「リぶら」横には伊賀川が流れている。「人と近い川がいいね」(近藤さん)。



近藤さんはかつて伊賀川に関わる仕事もされていた。伊賀川は平成20年8月の豪雨で河道内にあった家が流されるなどの被害があった。その後、多自然川づくりが行われた。川の流れがいかされ、水辺に多様性がある、とても気持ちのよい空間だった。

近藤朗さん作成資料「愛知・川の会 2003～2018」より、2014年度以降の活動

「愛知・川の会」関連講演会、シンポジウム、セミナー		「愛知・川の会」で訪れた河川	
2014年 5月【総会】	吉村伸一 「多自然川づくりの実践と課題」	2014年 ・吉村伸一氏と多自然川づくりを巡る ①長久手市と共に香流川を考える ②稗田川、伊賀川、逢妻男川、天白川の自然 ・(矢作川)巴川、矢作川、籠川エクスカーシオン ・三重鈴鹿川水系エクスカーシオン／「川づくり会議みえ」との共催事業	
2015年 5月【総会】	向井貴彦(岐阜大学) 「里山の魚たちは今？」		
2016年 3月【第188回 河川文化を語る会】	遠山光嗣(半田市新美南吉記念館)「新美南吉童話に描かれた里山」～知多半島の森・川・溜池を中心に～		
2016年 5月【総会】	古賀邦雄(古賀河川図書館館長)「文献に見る河川・湖沼・そしてダム」	2015年 (庄内川)内津川・地蔵川エクスカーシオン	
2017年 3月【第192回 河川文化を語る会】	内山りゆう(ネイチャーフォトグラファー) 「恵みの水 めぐる川 躍動する命を写す」	2016年 ・堀川ウォーク 堀川全川／「758ミズべる会」との交流事業 ・静岡県佐鳴湖流域エクスカーシオン	
2017年 5月【総会】	福和伸夫 「震災に備え見たくないものも直視し 転ばぬ先の杖」南海トラフ地震を見据えて	2017年 ・天白川エクスカーシオン&交流会(名古屋市)：～2000(H12)東海豪雨、激特事業後、現在 ・巴川エクスカーシオン(岡崎市／新城市)：豊川巴川、矢作川巴川の分水点から流域を見る ・第一回【ブラアイチ in 岡崎】への協力(岡崎市)：乙川「久後崎切れ」現地解説担当	
2018年 3月【第196回 河川文化を語る会】	植松久芳(NPOウエザーフロンティア東海) みずから守るための気象・防災情報の活用		

【参考】 2018～2019年の活動 アルバム

- ・2018.5月 総会 講演会「川筋の変遷とその痕跡」・2018.6月 「ブラアイチ in 蟹江」
愛知県河川課職員 今井誓也氏
「ブラアイチ」を語る愛知県職員



- ・2018.11月 「ブラアイチin碧南」
- ・2019.3月 「ブラアイチin犬山」「ブラアイチin豊川」でも案内役



- ・2018.11月 交流会「碧南水族館への誘い」
- ・2018.11月 「矢田川エクスカーシオン」



- ・2018.10月 「あいち 朝まで川談義」(岡崎市内)への参加

- ・2019.3月 【第200回 河川文化を語る会】
「江戸時代の環伊勢湾経済圏と特産物流通」
日本福祉大学 曲田浩和 教授